

意図せざる善意／意図せざる悪意

——鷺沢萌『ほおずきの花束』の授業——

白瀬浩司

(初出誌 || 『解釈』第44卷第4号、一九九八年四月)

意図せざる善意／意図せざる悪意

——鷺沢萌『ほおずきの花束』の授業——

白瀬浩司

一

「あの、ほんとにありがとうございます」——そう言って頭を下げた途端、唐突に冷たい涙が滝のように夏代の頬を流れ落ちた。彼女は自分の涙に戸惑いながら、眼前の老人に「お礼です」と叫ぶように告げてほおずきを渡すや、一目散に駅へと続く坂道を駆け昇った。老人は驚いた顔で彼女の後ろ姿を見送っていた。……心臓がばくンばくンと音を立てた。終わりがけた夏の風が夏代の頬をすべっていった。／そう思ってしまったことでなくとも、優しさとか善意とかいうものは確かに人間を救うことがあるんだな。わけのわからなくなった頭の中で、夏代はそんなことを考えていた。／何か月ぶりかで走った。何か月ぶりかで身体が汗のぶんだけ軽くなり、そのぶん心も軽くなつた気がした。

これは、うっかり財布を落としてしまった主人公がそれを交番に届けてくれた老人の家を訪ねた場面で、短篇小

説『ほおずきの花束』のラスト・シーンでもある。このとき、彼女が戸惑いや救いを感じたのには、それなりの経緯と理由があった。

夏代は来春に受験を控えた高校三年生である。この夏休みは彼女にとって「最低最悪のもの」となるのだが、財布の遺失は彼女を襲った一連の「悪いこと」の最後に起こった。「一学期最後の模試で、史上最悪の結果を出した」のを皮切りに、終業式前日の「遊び仲間たちとのコンパ」では大好きだったオノ君に勇気を出して告白するも見事にふられてしまう。参加した夏期ゼミの「授業にはまるで身が入らず」、やがて五月の誕生日に買ってもらったばかりのウォークマンが故障した。買った店に電話すると本店でなら無償修理できるといので川向こうの本店までわざわざ出向く羽目になるが、その折にキャッシュカードと原付免許入りの財布を落としてしまったのである(さらに、そのことで母親には「こっぴどく叱られる」)。

そんな中でも、夏代にとって「いちばんイヤなこと」(あるいは「いちばんマズイこと」)は、初めての「フラれるという経験」であった。そのことで彼女は「思いきり落ちこんでしま」い、「嵐のような激しい後悔」に襲われていた。「どんなことが起こっても、これ以上悪い状態にはなり得ない」、「もう自分には、良いことなんて何にも起こらないような気がした」という心境の彼女に、蓋し「悪いこと」は「続けざまにやって来」た。

ところで、ほおずきも春には花を咲かせるというが、私の幼少期の記憶を辿ると、それはむしろ(秋の季語とされる)朱色の実の鮮烈な像を伴って心に浮かんでくる。この短篇小説も同じイメージによって彩られていることが、次のような箇所——主人公が老人の家へ向かう場面である——から窺えよう。この箇所は同時に、『ほおずきの花束』という標題に関わる直接的な記述でもある。

駅前から銀杏の並木道をずっと歩いていくと、途中にある花屋の店先に明るいオレンジ色の花が咲いていた。何の花かと思って近寄ってみると、それは花ではなく少し早いほおずきの実だった。夏代はほおずきを買った。愛想

のいい店のおばさんが、「少しおまけしときますね」と言いながら一本余分に持たせてくれた。／夏代はほおずきを花束のように抱えながら並木道を歩き、坂道を下り、昇り、また下った。

主人公の目を射た「明るいオレンジ色の花」は、実は「ほおずきの実」であった。それを買い求めた彼女は「ほおずきを花束のように抱え」て老人の家をめざした。この場面に即して言えば（とりわけ「ほおずきを花束のように抱え」という表現に留意するならば）、作品の標題『ほおずきの花束』は〈ほおずきの実〉の〈花束〉の謂となり、ある種のねじれを孕むものであることが知れる。あるいは、〈ほおずきの実〉を〈花束〉のように抱えた夏代の姿を含意していると考えてもよいのだが、いずれにせよ、だとすればなぜ〈ほおずき〉の〈花束〉なのかという根本的な問いはそのまま問われ続けることになる。はたして、この標題は小説の展開といかに照応し、何をしるしづけているのであろうか。

一一

「最初読んだ時、はじめの方に『どんなことが起こっても、これ以上悪い状態にはなり得ない』と書いてあって、僕はどんなことが起こるのだろうと思っていた。でも、これといって大きな出来事があったわけでもない。」（哲朗・Y）、「私が夏代の気持ちが変わると思ったのは、私自身がよくそういう気持ちにすぐなってしまうからだ。一つ一つを取り上げてみると大した事はないのだが、しかしそれらは、何気ない事で解決するものである。」（晋也・T）、「ほおずきを買った時おまけしてもらったのも明るい気持ちだったからだ。不幸だ不幸だと思っている時より明るい気持ちでいる時の方が良い事が起こる。本人の気持ちが自分を幸福にするか不幸にするかを決めるのだから

と思った。」(健一・S)、「僕もこれに似た経験がある。でも、今悪いことが続いても、頑張っていれば必ずいいことが起こるといのように、常にプラスの方に考えていくことが大事だと思う。」(尚史・K)といった生徒たちの感想が正しく言い当てているように、主人公の身にふりかかった「悪いこと」は、傍目はだめに見れば些細ささいな出来事ばかりであり、結局のところ、「本人の気持ちの持ち方の問題」(角川文庫「解説」)でもあった。

それでも、すっかり「落ちこんでしま」った主人公は、財布が交番に届けられていたという、これまた些細な出来事のおかげで「久しぶりに他人に優しくされたような」気分になる。「明るいオレンジ色の花」に心惹ひかれたのも、老人と対面した後に「心も軽くなったような気がした」のも、彼女の「気持ちの持ち方」が変わったからにはかならない。《陰から陽へ》という主人公の心境の変化は一読してすぐにわかるのだが、授業では彼女を取り巻く周囲の人々の反応を拾い上げて確認していくことにした。なお、作品の語り口は、「夏代は……」と第三者的に語りながらも、引用①を除けば、ほぼ主人公の内面に寄り添ったものとなっている。

① オーノ君は困った顔で少し笑い、言ったのだ。／——ごめん、おれ俺、好きな子いるから……。

② 親友の綾は、思いきり落ちこんでしまった夏代を見て、「今までフラれるという経験をしなかったのが悪い」と言った。

③ 「……ばかやろお」／思わず低く呟くと、隣りに立っていたサラリーマン風の若い男が、驚いた顔で夏代を見た。
④ 「どこにあんですか、その本店っていうのは」と不機嫌な声で訊くと「は、武蔵小杉です」と恐縮しながら答えた。

⑤ 母親にこっぴどく叱られ、取りあえず銀行と郵便局に電話してキャッシュカードの取引停止手続きをした。

⑥ 「あー、届いてるよ、それ」／若いお巡りさんは机の引出しから、こともなげに夏代の財布を取り出した。

⑦ 「良かったねえ、無事戻ってきて」／年とった方がニコニコしながら言った。

㊦ 愛想のいい店のおばさんが、「少しおまけしときますね」と言いながら一本余分に持たせてくれた。

① 「あの……藤原俊造さんですか」／「そうですが」／老人は不思議そうに、ほおずきの花束を抱えた奇妙な女の子を見つめた。

① 「あの、あたし、お財布拾ってもらった者なんですけども……」／「ああ」／老人は合点がいったように頷いた。

㊦ 夏代は「お礼です」と叫ぶように言っただけでほおずきを老人に渡し、驚いた顔の老人と犬に「さよならっ」と言った。

まずは引用㊦と㊧をみてみよう。なお、㊦・㊧は失恋、㊨・㊩はウォークマンの故障、㊪と㊫は財布の遺失にそれぞれ関わる箇所である。

周囲の人物の言動が（夏代の心境を投影されずに）ニュートラルに語られているのは、引用㊬（ちなみに、「親友の綾」に関しては全篇を通じて同様である）と引用㊭である。ちょうど、財布が主人公の手許に戻る瞬間にあたる引用㊮をはさんで、彼女を被動作主とする引用㊯と引用㊰では、日常の一齣——母親にしる花屋のおばさんにして、いつも通りに事態（娘の失態・買物客）に対処していたに過ぎまい——の受けとめ方が微妙に異なってきた。また、引用㊱と㊲はいずれも彼女の「不機嫌な声」への反応であったし、引用㊳「ニコニコしながら」というのもおそらく（その直前に描かれた）「飛びあがりたいたいのを我慢して」いる夏代の姿に呼応するものとしてある。

周囲の反応は、かくて折々の主人公の表情や態度を鏡のように写し出すとともに、《陰から陽へ》という彼女の内面の変化に見合うものとなっている。だとすれば、引用㊴についても、「オーノ君にふられたのは、顔があまり美人ではないのか、それともオーノ君の理想が高只是因为顔はまあまあだったのだろうか。」（健一・S）という疑問に応ずるかたちで、少なくとも次のように言うことはできるだろう。

夏代がオーノ君に「あなたが好きだ」と告白したのは、「一学期最後の模試で、史上最悪の結果を出し」、「第一

志望はおろか、すべり止めのつもりで考えていた短大でさえ危ないと言われ」た後、しかも、終業式前日の「遊び仲間たちとのコンパ」で「受験が終わるまで遊ばないという宣言をした」直後のことである。「入試を前にこのようなことをしては、勉強に身が入らないと思う。なぜなら、もしOKが出たとしても浮かれてしまつて何もできないし、この物語のように、ふられると誰でも精神的にズタズタになり性格が暗くなる。ただでさえ受験勉強は、勝手に自分自身の性格が変わっていくのに、告白というものをもつとよく考えて行つた方がよかつたと思う。」(宏一・S)、「今の自分は推薦入試のことでいちおう頭がいっぱいだ。今年の夏休みは今までに楽しくなかった。夏代と同じで何となく塾へ通い、休みを過ごした。」(安之・O)といった感想を援用するならば、オーノ君に告白をした時、既に「受験」という重圧が夏代の「顔」(表情)に《陰》を生じさせていたのではなかつたか、と。「好きな子いるから……」の真偽は措くとしても、オーノ君は「困つた顔で少し笑」うことで彼女に応じた。

次に引用①と②である。これらはいずれも、主人公が老人を訪ねた場面に織り込まれている。引用①と②は、見知らぬ女の子が〈ほおずき〉の〈花束〉を抱えて自分を訪ねてきたのだから、老人の反応としては当然であろう。ただし、「奇妙な女の子」という表現には、この箇所が主人公の内面に寄り添つた語り口から離れていることを考へ合わせると、読み手の側の「若い人は、僕も含めお礼に直接行くという人もめずらしいと思う。僕だったら電話だけにすると思う。それに、誰だって、この年の子がお礼ではおずきを渡すなんて、予想もできないだろう。」(優介・H)、「普通だったらお礼にほおずきの実なんか持って行かないと思うし、花屋の店先にはもつといろいろな花があると思うけど、その中で明るいオレンジ色をしたほおずきの実が一番きれいに感じられたから、夏代は選んだんだけと思った。」(勇作・N)といった感覚すら投影されていくように思われる。

また、引用③の老人の「驚いた顔」は、『お礼です』と叫ぶように言つてほおずきを「渡されたせいばかりではない。ちょうど引用①と②との間には次のような描写がはさみ込まれている。

「あの、ほんとにありがとうございました」／そう言って頭を下げたとたん、唐突に冷たい涙が滝のように夏代の頬を流れ落ちた。びっくりしたのと恥ずかしいのが一緒くたになって、夏代の内側を駆けまわった。

老人の「驚いた顔」は、眼前の少女が「唐突」に流した「滝のよう」な涙の意味を図りかねてのことでもあった。「夏代の態度が大げさに見える理由を考えると、告白した相手にふられ、ウォークマンが壊れ、修理屋の場所が遠く、更に大事なサイフを失くしてしまったこと、となる。老人は夏代の苦労を知らないから、自分はただサイフを拾って届けたんだ、と思っっている。だから、老人と夏代との感覚がずれてしまってるのだろう。一方はあ然として、一方は感極まって泣いてしまった。」(正昭・A)という感想がこの場面をうまく説明づけてくれている(こうした老人の一連の反応が、「そう思っただけでなくとも、優しさとか善意とかいうものは確かに人間を救うことがあるんだな。」という夏代の実感に結びついていくことは言うまでもない)。なお、この引用箇所については次のような課題を設定することもできよう。すなわち、引用⑥の直後に、

「なんだかここ数か月のうちで、久しぶりに他人に優しくされたような気がして、夏代は不覚にも涙ぐみそうになりながら「ハイ」と答えた。

という描写があるのだが、その時に(「不覚にもそうにな」ったのであるから、結果的には)涙を見せなかった主人公が老人に頭を下げた途端、「滝のように」涙を流したのはなぜか、という問いかけである。言うまでもなく、ここにおける「不覚にも」という表現に、連続する「悪いこと」の渦中で何とかもちこたえようと強がっている彼女の姿を看取しうるはずだ。そんな意識とは裏腹に突然流れ落ちた涙を、いわば頑なに虚勢を張ろうとする意識を突き破って発露した自身の素直な心のはたらきを、だからこそ、「びっくりしたのと恥ずかしいのが一緒くたになって、夏代の内側を駆けまわった」というかたちでしか主人公は捉えきれずにいたわけである。

さて、それではなぜ〈ほおずき〉の〈花束〉なのであろうか。既にふれたように、この標題に関わる直接的な記述から知れるのは、夏代の目にとまった花屋の店先の「明るいオレンジ色」が「ほおずきの実」であったことと、即座にそれを「買った」彼女が「ほおずきを花束のように抱えながら」歩いたということである。そして「何の花かと思つて近寄つ」ていく姿から、それが夏代の心を惹きつけたであろうことは疑うべくもないし、彼女がほおずきに心惹かれた理由として、「明るいオレンジ色」が明るさを取り戻しつつあった彼女の内面と同調するものであったことを指摘するのも難しいことではあるまい。しかし、だとすれば、ここで浮かび上がってくるのは、夏代の心を惹いたのはむしろ「明るいオレンジ色」であつて「ほおずきの実」そのものではなかつたということであり、したがつて、「花束」もたまたま〈ほおずき〉の〈花束〉だったに過ぎないということになりはしないだろうか。

とはいえ、少なくとも提出された感想をみるかぎり、「夏代がお礼をするために藤原俊造さんの家へ向かう途中、花屋でほおずきを買つたのは、ほかの花よりもほおずきの色が自分の気持ちと同じように明るかつたので無意識のうちを買つたのではないかと思う。」(裕介・N)、「お礼として老人にほおずきの花束をあげたのは、自分自身の気持ちとして、花ではなくほおずきの実が自分の本当の姿を包みこんでいるように見えたからではないだろうか。」(純光・T)、「夏代の喜びがほおずきの花束の美しさにもよく表れていたと思う。その花束を渡した時、夏代の強がつている態度もようやく緩和されたのである。」(充・M)、「この作品の中に出てくるほおずきが夏代の気持ちをうつし出していると私は感じた。ほおずきのように閉じてしまった夏代の心。老人の親切が夏代のほおずきを開く小さなきっかけを作ってくれたのだと思う。だから、夏代がほおずきの実を老人に差し出す場面は、他人に対して

彼女が心を開いたことを表しているのだと思った。」(晋也・T) というふうには、生徒たちが〈ほおずき〉を夏代の内的必然として素直に受けとめていることだけは確かなようである。

前章に引用した生徒の感想「花屋の店先にはもつといういろいろな花があるとと思うけど、その中で明るいオレンジ色をしたほおずきの実が一番きれいに感じられたから、夏代は選んだんだと思った。」の中にも、問題解決の端緒は示されている。花屋の店先にあるのは、もちろん花ばかりとは限らないが、〈ほおずきの実〉もまた多くの〈花〉に囲まれてそこにあった。沢山の〈花〉の中で、〈花〉ならぬ〈実〉——いわば、周囲とは異質な存在——が〈花〉に劣らぬ「明るいオレンジ色」の光彩を放っていた。それを見つめる夏代は、傍目には些細なことで落ち込んでしまい、「遊び仲間」であった「受験を控え」た子たちとも「附属高に通っている子たち」とも同じものにならないでいる。「みんな今ごろちゃん勉強してんだろなあ」と考えるにつけ、「腹立たしいのと悔しいのと情けないのがごっちゃになって」襲ってきたが、それでも、彼女は強がり、虚勢を張ることでわずかに自分を保とうとしていた。蓋し、その虚勢を張る意識の下で(財布の一件を契機として)発露しつつあった彼女の〈実〉の部分こそが、〈花〉に囲まれた〈ほおずきの実〉の姿に感応したのではなかったか。のみならず、夏代が〈花〉ではなく〈ほおずきの実〉を手にする姿は、やがて他人に対する虚勢(花)よりも自身の素直さ(実)を見つめなおすことになる彼女の姿とも響き合うものとしてある。ともあれ、夏代が花屋の店先で選び取るのは、やはり〈ほおずき〉でなければならなかった。

鷺沢萌『ほおずきの花束』の授業は全三時限、一九九六年度の高三普通科における二学期後半の取り組みである。同年度の教材選定は「他者との関係性」と「個体(生命)の尊厳」の発見」という年間テーマに基づいてなされており、『ほおずきの花束』がこのテーマに響き合う作品であることは言うまでもあるまい。文庫本で八頁ほどの短篇であったことから、読解の作業は(本稿第二章に述べたごとく)拾い上げた表現を一つずつ検討していくかた

ちで進めた。なお、作品の標題が孕^{はら}むある種のねじれについては、第一時限始業の段階で注意を喚起したものの、読解作業を終えた後も、生徒たちへの問いかけとして留保したまま感想文（四百字以上く六百字以内）を書く作業に入った。感想が出揃った後に彼らの読みに基づいて読解のまとめをおこなうというのがいつものパターンだからである。

自主教材を用いる場合、当然ながら、生徒も私も徒手空拳で作品に向き合うほかない。しかも、私は作品の主題や（今回のように）標題がしるしづけるもの等について自分なりの見解を事前に準備していないのが常だから、読解のまとめに向けて彼らの感想から手がかりを得ることは実に多い。したがって、ここまで引用した生徒たちの感想は不本意ながら部分的なものとなっではいるが、それはそのまま読解のまとめに向けた私の作業過程と一体のものである。

ここで、生徒たちの感想の中から数篇を全文のかたちで掲出しておくことにしよう。感想(1)・(2)は自分の日常と作品世界とを照らし合わせつつまとめたものであり、感想(3)は夏代の内面の変化について、感想(4)・(5)は標題がしるしづけるものについて、それぞれ自分なりの読みを示したものである。そして、提出された感想は、概ね、この三グループに大別することができるように思う。

(1) 「ほおずきの花束を読んで」(肇・I)

僕は財布を落としたが、返って来なかった。この話に出て来る様な事は、そうあるものではない。と、思っていたが、昨日、落とした財布が交番に届いて助かった、というやつがいた。／僕はその時、すぐにほおずきの花束を思い出した。友達の財布を届けたのもおじいさんで、お礼を持って行っても、「当然の事をしただけですから」と言っって受け取らなかったそうだ。／最初にこの話を読んだ時は、「こんな事あるわけないやろ、俺の財布は返ってこうへんのじゃ」と思ったが、友人の話聞いてまんざらでもないな、と思うようになった。／まあ落としても誰

も届けてくれない俺は、せいぜい落とさない様に気を付けるしかないのだろう。／黒い革で、ボタンが二つ付いているハーレイダビッドソンの財布を見かけた方は七組の肇・Iまで届けてやって下さい。くれぐれも中の物をぬかない様をお願いします。

(2) 「ほおずきの花束」(淳史・S)

すぐく率直に女の子の気持ちと受験生の気持ちを、一緒にしたような作品である。この子の気持ちがすぐくわかる気がする。二つ三つ悪い事が続く中、ふっとした優しさがすぐく身にしみるほどうれしくて、どうも体では表せなくて、ついつい涙が出てしまったんだと、ぼくは感じた。／この作品の中で好きというか、気に入った言葉が一つ。それは、「優しさとか善意とかいうものは確かに人を救うことがあるんだな」。これは自分にとってもなんか重みのある言葉のような気がする。ぼくが大学をスポーツ推薦で受けて失敗した時、クラスみんなは笑ったりしてたけど、みんなそれぞれ、それなりに気をつかってくれてた様な気がする。ぼくは、すぐく精神的にダメージを受けていた時にそんな感じやったから、友達っていいもんやなとすぐく、あらためて実感した。ぼくもみんながそんな時、助けてやれるような人間になれるといいなと思っているけど、まだそうではないみたいだ。

(3) 「冷たい涙の中身」(哲平・K)

この話は主人公が高三の受験生で、しかも異性であることから各状況における微妙な心の変化に多少なりの興味が持てた。夏代がみんなの前で受験が終わるまで遊ばないと言っておきながら二高のオーノ君に告白する所などは、この年齢になっても一つ一つの言動に責任感が持てない自分達の世代を感じた。このオーノ君にふられたことにより夏代はますますプライドが高くなるのだが、それは「不覚にも涙ぐみそうに」という文章からもわかるように、風船のようにただ張りつめた薄いプライドであるように思う。／警官や花屋のおばさんに優しくされて徐々にプライドという風船が縮んでくるという状況は「坂道を下り、昇り、また下った。」という文章から読みとれた。最終

的には、老人に会ってお礼をし優しさとか善意が人を救うことに気付いた夏代が流した冷たい涙は、自分の高いプライドや受験やオーノ君のことなどからくる一種のストレスのようなものが流れ落ちたことを表しているのではないかと思つた。

(4) 「心〓ほおずき」(博嗣・I)

人の優しさや善意は、本当に人を救ってくれる。最低最悪の精神状態にあった夏代も、この人の優しさによって心を開くことができたのである。／ほおずきは、そんな夏代の心の状態を表しているのではないだろうか。はじめ夏代は男の子にふられて悪いことが度重なり、弱い自分を守ろうと強がってみせた。夏代の明るさや素直さが、心の内に閉じ込められてしまったのである。すなわち、自分を守ろうと強がる態度がほおずきのふくろ、そして明るさや素直さが実ということである。／ところで、すっかり閉ざされてしまった夏代の心、それを開いたのが藤原俊造という老人である。この人の優しさで、夏代はほおずきの実を見せはじめるのである。他人に優しく包まれて、それは花束となった。夏代の明るさと素直さが詰まった強い感謝の表れだろう。／はじめは強がっていたふくろも実に影響されて、オレンジ色の明るさを持った。どうやらこのほおずきだけは、一足早くできたようである。

(5) 「主題に迫る」(健太郎・S)

授業で取りざたされた「夏代はほおずきを花束のように抱えながら……」の部分は、その前の「途中にある花屋の店先に明るいオレンジの花が咲いていた」という記述と関係があると思う。単に「店先に少し早いほおずきの実があった」と書けば良いのに、わざわざそのような記述をしている。これには何かが隠されているような気がする。私が思うには、夏代は、段々と優しさや善意が人間を救うことがあると考えてきているのだが、「あるんだな」と言っているのであって断定はしていない。まだ夏休みのいやな出来事が頭から離れなくて完全に信じきれていない。つまり、「ほおずき」は優しさや善意が人間を救うと分かりかけている夏代をさし、「花」はまだ分かっているかない

階の夏代をさす。「ほおずきの花束」は、その両方が入り混じった情況、すなわち、「あるんだな」という夏代を象徴的に表すのである。／＼これらのことから、この作品の主題は、主人公が人に親切にされ、段々と人のあたたかさが理解できるようになってきたが、その一方ではまだ理解できていない部分もある複雑な心境を表しているものと思われる。

四

高三の二学期後半の最初の授業に、『ほおずきの花束』を自主教材として取り上げたのには理由がある。

この作品に取り組んだ十一月の初旬は、まもなく始まる大学の推薦入試のせいで、教室の雰囲気は何となく落ち着きを失う時期でもある。授業中、生徒たちが内職に精を出し、深夜の受験勉強に備えて英気を養いはじめるのも、まさにこの時期であった。例年のことながら、比較的のんびり屋の多いわが生徒たちも、さすがに土壇場になるとあせりや不安にかられ、時に無力感にとらわれ、精神的なバランスを崩してしまう。夏代の姿は彼らのそれであり、だからこそ、担任の訓示よりもむしろ、同年代の主人公の視線を通じて（彼女の感得した）「気持ちの持ち方の問題」に気づいてほしいと考えたこと——これが第一の理由である。

第二の理由としては、この教材に入る前に単行本で約三十ページに及ぶルポルタージュ（松井やより『魂にふれるアジア』を読む作業（全十時限）を終えたばかりであったことと、この教材を終えた後にプリント十七枚に及ぶ小説（デビット・ゾペティ『いちげんさん』）の読解（全十五時限）に取り組み予定であったことが挙げられる。先に述べた教室の状況に鑑みて少々肩の力を抜く必要もあったし、長篇の授業に入る前に、小説の一つ一つの表現

にこだわってみることで読む作業そのものの捉え返しをしておきたいという意図もあった。

第三の理由は、この教材自体の領分では当然ないが、ルポルタージュ『魂にふれるアジア』に報告された発展途上国の現実を、私たちの日常の次元からもう一度照射しておきたいと考えたところにあった。これはむしろ、年間テーマに基づく教材の連続性や教材相互の響き合いを^{あんばい}按配する作業、いわば私の側の教材選定の基準（あるいは教材観）に関わる問題でもあると言えよう。『ほおずきの花束』のラスト・シーンに示された夏代の実感——「そう思っていたことでもなくとも、優しさとか善意とかいうものは確かに人間を救うことがあるんだな。」——は、いわば《意図せざる善意》による《救い》の存在を、おぼろげながらではあれ、確かに探り当てている。

無論、老人にしてみれば、それはまさに《意図せざる》ところであり、ごく当たり前の日常の一齣に過ぎなかった。そんな自然な優しさを私たちは忘れずにいたいものだ。ところで、このことを敷衍^{ふえん}する時、《意図せざる善意》と同じように、《意図せざる悪意》もまた私たちの当たり前の日常の中に潜^{ひそ}んでいるはずだ、という結論に辿^{たど}り着くように思う。すなわち、《意図せざる善意》の、ある種の陰^{ネガ}画として《意図せざる悪意》は存在する。『魂にふれるアジア』には、発展途上国に対する日本の企業進出の問題が、現地の人々の生活のみならず生命までも脅かす「公害輸出」の現実として存在することが生々しく伝えられていた。はりめぐらされた《関係性》の網をたぐれば、安い製品を気軽に手に入れるという私たちの日常的な行為が、まさに《意図せざる悪意》として、時に現地の人々の日常を脅かす営みに加担するかたちで結果することになるわけである。

付記（読者のみなさんへ）

このたびは、私の授業実践をダウンロードしてお読みいただき、ありがとうございます。私のホームページ《たまぶり通信》では、「授業実践記録」(<http://www.nextfp.com/mb/lessons/>)に次のような授業実践を公開しています。WEB版の閲覧とPDF版のダウンロード、いずれの形でもお読みいただけるようになっていきますので、是非、ご利用ください。今後もう少しずつ追加していく予定です。

《たまぶり通信》WEB版・PDF版

- 山田詠美『蟬』の授業
- 現代の歌物語を書く
- 鎌田敏夫『会いたい』を読む
- 清水義範『トンネル』の授業
- 鷺沢萌『ほおずきの花束』の授業

また、「生徒たちの《現実》と切り結ぶために」と題した全六篇のシリーズを《でじたる書房》にて販売しています。この一連の論考は、高校生たちの現実感覚や体験と響き合うような現代作家の作品（五篇）を自主教材として取り上げた授業実践あるいは授業指針について述べたものです。タイトルと扱った作品は次の通り。あわせてお読みいただければ幸いです。

《でじたる書房》PDF版

- 心の《皮むき》のために——山田詠美『賢者の皮むき』の授業——
- 恋人という名の他者——岩川隆『有楽町心中』の授業——
- 選択肢としての《生》——重松清『舞姫通信』の授業——
- 《希望》の在処——村上龍『希望の国のエクソダス』の授業——
- 新たな《現実》に向かって——鷺沢萌『卒業』の授業——